

日本からみた “Thailand : A Loosely Structured Social System”

——日本学と東南アジア学の接点を求めて——¹⁾

飯 島 茂*

A Japanese Comment on “Thailand: A Loosely Structured Social System” from the Viewpoint of Historical Anthropology

Shigeru IJIMA*

Much discussion of Thai society has been generated by John F. Embree's famous and classic article entitled “Thailand : A Loosely Structured Social System,” published in 1950. The discussion, however, has tended to ignore the ecological and historical aspects of the question. Furthermore, little attention has been paid to the ‘tightly structured social system’ of Japan, although Embree compared ‘loosely structured’ Thai society with the ‘tightly structured society’ of Japan in his original discussion.

Here, I propose that Japanese society is fundamentally rather ‘loosely structured,’ based on its

bilateral kinship system and the country's favourable ecological conditions. It appears ‘tightly structured’ only because the leaders of the society have made efforts to ‘tighten’ the ‘loosely structured social system’ of Japan by, for example, emulating some of the social disciplines of the Chinese continent in order to build a ‘state’ in the islands. Thus, it is incorrect to juxtapose Japanese and Thai societies without referring to their historical backgrounds. The same argument, of course, would hold for the comparison of other societies.

* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所;
Institute for the Study of Languages and Cultures
of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign
Studies

1) そもそも、筆者が、東南アジア研究を手がけるようになったきっかけは、なんとといっても、京都大学東南アジア研究センターにおける第1回東南アジア村落調査に参加させていただいたことであろう。

そのころの若手は、いまや学界の第1線になっているマレー班の口羽益生教授、坪内良博博士、前田成文教授、ならびにタイ班は、いまは亡き畏友水野浩一教授と、矢野暢教授、それにわたくしの6名であったと記憶する。

なかでも、タイ国の農村で苦楽をともにした水野さん、矢野さんとの思い出には、忘れ難いものがある。東北のコンケン地方で調査に従事していた水野さん、南部はソクラー地方に住んでいた矢野さん、西北部のメサリアン地方にいたわたくしの“3人組”は、2～3カ月に1度ほど、当時、バンコクはペブリ通りにあったリエゾン・オフィスを落ち合って、久しぶりの“日本”や“文明”を楽しんだものであった。そして、村の生活のこと、調査や研究のこと、

さらに将来のことなどについて、しばしば夜のふけるのも忘れて話し合ったものである。こうして、当時のことなどを思い出しながら、筆を走らせていると、10数年も前のあの日あのことのこともが昨日のことのように思い出されなければならない。だが、ふと現実に戻り、水野さんとはすでに幽冥をへだててしまったことに気付くと、なんとも悲しく、やりきれない気持ちでいっぱいである。あの日焼けした元気な水野さんの姿からは、こんなに早く追悼の筆を取らせていただかなければならなくなるとは、夢にも思っていなかった。

元来、本稿が扱っているような問題は、よく知られているように、タイ社会にも、日本社会にも造詣の深かった水野さんにより手がけられたものであり、その成果が内外の学界から、大いに期待されていたのである。それだけに、大業半ばにして早逝された優れた研究者である水野さんのことが、いまさら、惜しまれてならない。合掌。

本稿作成にあたり、前田成文教授に貴重なコメントをいただいた。記して、謝意を表したいと思う。

は じ め に

このような日本社会とタイ社会の比較について、正面から、しかも本格的に取り扱ったのは、世界の学界でも、われらが畏友故水野浩一教授がはじめてではなかっただろうか。同教授が、1976年に出された労作「家族・親族集団の国際比較——タイ国と日本」[水野 1976] は、ファーストハンドのフィールド・データにもとづき、詳細な記述と緻密な分析によって、東南アジア学と日本学の接点を求めようとしたパイオニア・ワークであった。この論文は、わが国で発達してきた家族社会学の伝統を踏まえながら、文化人類学的な動態論を導入して書かれたものである。

そこで、拙稿は、これと若干角度を変えて、マクロな立場から、日本社会とタイ社会の比較に歴史人類学的接近をおこなってみようと思う。なお、本稿作成にあたっては、Hans-Dieter Evers が中心になっておこなわれた‘タイ社会論’をめぐる大論争の結果を収録した *Loosely Structured Social Systems: Thailand in Comparative Perspective* に対する水野教授の見事な書評[水野 1970]が、たいへんに参考になったことを、ここに明記しておこう。

I Embree の‘タイ社会論’と、それをめぐる論争

1930年代に、わが国の熊本県須恵村を研究したことで有名なアメリカの文化人類学者 John F. Embree は、1926年から1948年にかけて、数回にわたり、タイ国を訪問する機会に恵まれた。また、その間、1947年には、合衆国政府の cultural officer として、バンコクやベトナムのサイゴンに滞在したこともあった。これらの体験から、Embree はタイ社会が自分のフィールドであった日本社会と、きわ

めて様相を異にしていることに着目して、あの有名な“Thailand: A Loosely Structured Social System”と題した論文を、1950年の *American Anthropologist* No. 52 に書いたのである。

この論文が準備された1940年代後半からみると、その後の文化人類学や東南アジア研究の発展には目覚ましいものがあった。また、Embree のタイ社会に関する認識がいささか impressionistic であるために、今日の学会では、この論文に対する毀誉褒貶はきわめていちじるしい。しかしながら、少なからぬ批判にもかかわらず、東南アジア研究、とりわけタイ国研究においては、Embree の‘loosely structured social system’論が研究のひとつの出発点になっていることは間違いないと思う。いまは亡き畏友水野浩一教授がかつて学んだコーネル・スクールの主流も、大筋では、このような Embree の考えに属していた。

Embree によれば、タイ国は他の東南アジア諸国とは、いろいろな共通点を持ちながらも、きわめてユニークな‘インド型’社会であると規定し、‘中国型’国家のベトナムとも、イスラム国家であるインドネシアとも、かなり相違していると述べている。そして、タイ族は、歴史的にみると、北方から南方へという南進の連続であるから、社会が‘緩く組織されている’結果となったというのである。その後、人類学的な論争の種になるのではあるが、Embree は「緩い社会の統合とは、個人的行動の許容範囲が大きいことを意味している」とだけ述べている。その意味で、権利と義務の遵守を強調する‘強固に組織された’社会といわれる日本やベトナムとは、きわめて対照的であるとしている。

この論の中で Embree は、タイ人は第1に‘個人主義的’であり、規則性や規律性、組織性に欠如しているとした。そして、義務感は

存在しているものの、その実行は各自の意志にまかされているという。第2に、人々の行動はムードに流されやすく、日和見主義的であり、状況主義的だともいわれ、役割転換も簡単であるとしている。また、人々は物事に無関心、冷淡、無感動、うそをつくことが容認されていて、社会関係は安定性を欠き、集団は離合集散を繰り返すとされている。さらに、身分制度もルーズであるし、社会統合が貧弱なので、急激な文化変容にもタイ人はあまり心理的緊張をひきおこさないとも説明している。

このように、Embreeによるタイ社会論は、きわめて鋭い洞察力に富みながらも、かれの資料も断片的、impressionisticである域を出ないのみか、分析も体系的でないうらみがある。第一、この論文の中心テーマである ‘loosely structured social system’ とか ‘tightly structured social system’ といったような基本的概念も十分に明確にされていない。そして、社会構造を問題にしながらも、説明は、ほとんど個人の行動の次元で語られている。

このようないろいろな問題点のために、その後も、とりわけタイ研究の中で、繰り返し論争がおこなわれてきた。その中で、前にも触れたように、Lauriston Sharp を中心にした Lucien Hanks, Jane Hanks, Herbert Phillips などのコーネル・グループが、大体、Embree のタイ社会を ‘緩く組織された’ 社会であるとする意見を支持した。それに対して、コーネル学派では Charles F. Keyes を例外として、その他の学派に属する人たちでは Jacques Amyot, Niels Mulder, Michael Moerman, Gehan Wijeyewardene, そしてタイ出身の学者である Boonsanong Punyodyana などが Embree の批判に廻った。

Embree のタイ社会論をめぐる大論争のハイライトとして、Hans-Dieter Evers が中心

となっておこなったシンポジウムがあり、その結果は1冊の本となり、1969年に出版されているので、ここに詳細を繰り返すつもりはない。しかしながら、その中で、Herbert Phillips と烈しい論争を戦わした Niels Mulder の Embree 批判の内容を要約してみよう。これは、批判の中では、もっとも組織的なものと考えられる。Mulder の論点は、次の3点になろう。

- 1) Culture and Personality (C.N.P.) 的分析が欠如している。果たして、個人の行動に、社会制度とか文化の一般的性質が、そのまま反映するであろうか。ここでは、タイ人の行動が反復的、規則的、制度的でないというように記述するのに留めるべきではないか。
- 2) いかなる社会でも、その成員は構造的、機能的に明確に規定された社会的地位と役割の中で、相互作用をおこなっている。従って、タイ社会も ‘loose’ であるはずがなく、すべての社会は構造を持つとしている。
- Embree の後継者は、‘loose’ といいつながら、具体的な記述や分析がなく、この言葉が万能であると考えているのではないか。
- 3) 分析にあたり、法的・規範的 (ascriptive) な面よりも、統計的 (nonascriptive) な面にも注目せよとしている。

以上の Mulder の批判のように、Embree の学説には、いくつかの致命的欠陥ともいうべき問題がある。しかしながら、それにもかかわらず、かれの用いた ‘loosely structured social system’ という言葉は、ある意味でタイ社会の一面をよく表わしていることもまた事実である。

II ‘タイ社会論’の問題点

ところで、これまで述べてきたような‘タイ社会論’に対して、筆者の立場からは、さらに三つの問題点を指摘したいと思う。

その第1としての問題点は、インドシナ半島の中心部のかなり広い地理的空間に広がっている社会を、果たして、単一の‘loose’というような概念で把握することができるかという疑問である。たとえば、コーネル・グループが調査をした Bang Chan 村は、首府のバンコクのすぐ郊外にあたる。そのため、どこの国でも都市化された地域がそうであるように、タイ国全体がというよりは、近郊農村である Bang Chan 自体がとりわけ‘緩く組織された’社会を持っていたのではないか。

Embree の‘タイ社会’を‘loosely structured social system’とする論をめぐる論争の中で、前に述べたようなコーネル・グループがおもに Embree 論の擁護に廻ったのは、果たして、このような事実と無関係であろうか。

それに対して、都市化の影響がはるかに少ないタイ国北部や東北部などを調査した Charles F. Keyes, Jacques Amyot, Michael Moerman, Gehan Wijeyewardene, そして Niels Mulder などが、Embree がタイ社会を‘loose’であるとした意見に反対したことは、偶然の一致だろうかということである。

批判の第2の点は、タイ社会が‘緩く組織された’社会であるか‘強固に組織された’社会であるかという論争であるにもかかわらず、‘緩く組織された’という概念が問題にされているわりに、‘強固に組織された’日本について誰ひとり正面から触れようとしなないことである。

これはまさにタイ社会の研究における世界の学界の限界を示したことになる。タイ社会と同時に、日本なりベトナムの社会を比較研究できる学者がほとんどいなかったからであ

ろう。この点は、畏友故水野浩一教授こそが、このような研究の道を開かれる最適任者であっただけに、いまさらながら同教授の早逝が残念でならない。

第3の問題点は、Embree の‘タイ社会論’をめぐる論争に驚くべきほど欠けていたのは、歴史的視点ではなかっただろうか。どの社会も、通時的にみると、社会構造自体も変化することがあると考えられるからだ。

筆者は、これら3点の批判を十分に踏まえながら、本論を展開することにしよう。

III ‘強固に組織された’社会と‘緩く組織された’社会

かつて、イギリス社会人類学の泰斗である E.R. Leach が、“The Frontiers of ‘Burma’” という、きわめて示唆に富んだ論文を発表したことがある。その中で、Leach は、今日‘ビルマ’と呼ばれているようなところで、北方高地においては、チンポーやルツ、アツィをはじめとする、チベット・ビルマ語系の山地民である、いわゆるカチン族などは、‘中国’文明の影響のもとに、祖先信仰や父系親族組織を発達させたとしている。

また、それと対照的に、南方平地のビルマ族は‘インド’文明のもとに、非系的な‘封建’社会を形成したと述べている。

Leach は、往年このようなフレーム・ワークを、‘ビルマ’だけではなく、研究対象をさらにインドシナ半島全体にも広げてみようという気持ちがあったのかもしれない。しかしながら、その後、東南アジアにおける人類学的研究が進むに従って、Leach のこのような見解をそのまま受け入れるわけにはゆかなくなった。

だが、1970年に、筆者自身が Leach 博士とこの問題について話し合う機会を得たが、大体、次の点で、見解の一致をみた。それと

いうのは、インドシナ半島といわれる、いわゆる大陸部東南アジアを巨視的に眺めると、北部高地における山の民にはいろいろなタイプの社会があるが、一般的にいて、父系的な単系親族組織を軸とした、‘強固に組織された’社会を形成している場合が多い。それに対して、南方に下れば下るほど、カレン系の山地民の多くのように、非系的で、‘緩く組織された’社会を持つようになる。ビルマ族やタイ族などにおいては、その傾向はさらにいちじるしい。

実は、Leach博士との話し合いは、このような事実認識だけであったけれども、東南アジア研究の先達である同博士から、駆け出しの研究者であった筆者に対して、このような社会的展開がどのような背景のもとになされてきたかということの解明すべきでもあることも強調された。

以来、このような社会力学について、筆者なりに考えてきたが、最近、この問題の舞台を、インドシナ半島から、アジア全体に拡大してみたのである。その結果、ごく巨視的には、大体、次のような仮説に到達した。すなわち、‘北国’のより厳しい自然環境や社会環境においては、エコロジカルな適応とみずからの生存をかけた防衛問題の必要性から、父系的な単系社会を基軸として、きわめて‘強固に組織された’‘金属型社会’ともいえるタイプの社会を構成している。

寒冷なタイガといわれる森林地帯や山岳地帯、さらに乾燥したステップなどに住んでいる狩猟民、山地民、牧民のような漂泊の民は、多くの場合、持ち前の機動力と、父系親族を基軸とした軍事組織によって、しばしば隣接する谷間や平原の定着農民を襲うこともある。従って、かれらは同じ農民であっても、‘南の国’の仲間たちのように安閑としているわけにはゆかない。漂泊的生活様式をしている剣呑な隣人に対して、みずからの社会をあ

る程度‘金属型’に編成し、侵略に備えなければならないのである。

このことを、Embreeの論文が扱っているタイ族について、概観してみることにしよう。タイ族は、申すまでもなく、インドシナ半島と呼ばれる地域に分布し、北は中国の雲南省、東はこの国の広西チワン族自治区、南は、ラオス、タイ国を通過して、マレー半島の北部に及び、西はビルマのシャン州から、インド東北部のアッサム地方に及ぶ、広大な地域に分布している。その数、約3,000万人ともいわれ、大陸部東南アジアにおける最大の民族集団である。タイ族のイメージとしては、谷間もしくは平野部に住んでいる水田稲作農民で、仏教を信仰している人たちということになっているが、大陸部東南アジア北部の山地には、若干焼畑をする、アニミストの山地タイと呼ばれる人たちも住んでいる。

とはいっても、タイ族全体を眺めると、広い地理的空間に対する分布と、多数の人口にもかかわらず、文化的同質性はかなり高いといわれている。だが、社会組織に関しては、住んでいる土地、土地の自然環境や社会環境に対する適応の相違によって、きわめて微妙な差異が観察できる〔石井 1975; 岩田 1964〕。ここでは紙面に制約があるので、いちいち詳細に触れることはできないけれども、ごく大綱みにいて、北方のタイ族は、自然環境も東南アジア・プロパーに分布する仲間ほどは恵まれていない上に、たえず漢民族をはじめとする異民族の直接・間接の圧力を受けやすい。そのため、父系にある程度傾斜した単系社会を形成することが少なくない。それに反して、インドシナ半島の中部から南部にかけての、比較的広がった谷間や平野部に分布しているタイ族の場合は、むしろ双系もしくは非系社会を形づくることが多い。いわば、北方山地型が比較的‘強固に組織された’‘金属型’社会であるのに対して、南方平

野部型は‘緩く組織された’‘非金属型’社会を形成する傾向にあるようだ。

これはなにも‘平地の民’タイ族に特有の現象ではない。チベット・ビルマ系の‘山の民’の間にも、ある程度、このことが妥当しているように思われる。たとえば、北方に住む前述のチンポー族、ルツ族、アツィ族といったようないわゆるカチン系諸族においては、おしなべて父系的傾向が強く、‘強固に組織された’社会を形成する。それに比べると、ビルマ東南部やタイ国西部にかけて分布しているカレン系山地民においては、双系的色彩の強い、‘緩く組織された’社会を形成することが多いことはすでに述べたごとくである。

このようなタイ族をはじめとする、インドシナ半島住民の社会編成原理に関する‘南北’における相違は、前に述べたような Embree のタイ社会論についての諸学者の賛否両論とも、微妙にからみ合っているようだ。すなわち、バンコク近郊農村を調査した学者の多くが、タイ社会を‘緩く組織された’とするのは、必ずしも都市化だけがその唯一の原因でないことをも指摘しておく必要がある。都市化と同時に、タイ国中部の社会は、タイ族が‘南’方に展開して‘緩く組織された’社会の一側面を示していると考えられるのではなかろうか。一方、タイ国の東北部や北部におけるタイ族の社会は、むしろ、タイ族の‘北’方型の社会から‘南’方型の社会へと推移する‘中間型’を示すものと考えられないだろうか。そのため、この地方でフィールド・ワークをおこなった研究者の多くが、これらのタイ族を‘緩く組織され’ていないと考えたとしても、それは不思議ではなかったのではないか。

このようにエコロジカルな観点を入れ考えると、Embree のように、タイ社会を一括して、‘緩く組織された’社会と規定することが、必ずしも正確でないことが分かるであ

ろう。

ところで、ここで一步譲って、Embree のように、タイ社会が‘緩く組織された’ものとしても、Evers を中心に開かれたシンポジウムにおいては、次のような重要な問題点が欠落していることを指摘しておこう。

IV 日本社会は‘強固に組織された’社会であろうか？

Embree がタイ社会を‘緩く組織された’社会とした背景には、前にも述べたように、日本やベトナム社会がそれと対照的に‘強固に組織された’社会と考えていたからであろう。ベトナムについては、Embree 自身が専門ではなかったが、少なくとも、日本については、みずからおこなったフィールド・ワークの経験から、確信を持って‘強固に組織された’社会と考えていたに違いない。

そこで、筆者は、タイ社会の対立概念である日本社会が、Embree が定義したように、果たして‘強固に組織された’社会なのだろうかということについて、歴史人類学的な観点から、吟味してみようと思う。

Embree に限らず、日本研究に従事する外国の文化人類学者は、とかく、それを‘強固に組織された’社会と考えることが多いのである。『菊と刀——日本文化の型——』の著者として有名な Ruth F. Benedict などその例外ではなかった。もちろん、わが国にも、このように考える研究者も少なくなかったと思う。

しかしながら、日本社会を地理的、歴史的に注意深く観察すると、これが必ずしも‘強固に組織された’社会であるとばかりはいいい切れない面があることも否定できないであろう。たとえば、奄美大島に住み着いた小説家で、日本社会や文化の基層に、鋭い洞察の眼を向けている島尾敏雄氏は、奄美の印象をも

とにして、次のようなきわめて興味深い記述をおこなっている。

「日本の中には、ある固さがあると、私は感じます。なにか、『こつん』と固いものがある。日本全体に硬化したものがあって、それはどうも日本人というものを狭くしているようです。そういう『固さ』が南に来ると、あまり感じられない。南島に住んでいる人たちに接してみて、やわらかな、なにかを感じずるわけです。」〔島尾 1968：15〕

さらに、島尾氏は、奄美にはじまる琉球弧に、この原因を見出す鍵を発見しようとしている。すなわち、「もしかしたら、奄美には日本がもっているもうひとつの顔をさぐる手がかりがあるのではないか、頭からおさえつけて滲透するものではなく、足のウラの方からはいあがってくる生活の根のようなもの。この島のあたりは大陸からのうろこに覆われることがうすく、土と海のおいを残している、大陸の抑圧を受けることが浅かったのではないか。」と述べて、「奄美をヤポネシア解明のひとつの重要な手がかり」〔同上書：9〕と規定している。

ところで、ヤポネシア (Japonesia) とは、島尾敏雄氏が、たしか1960年代の初めから使い出した合成語である。語幹は日本を示すロマンス系の用語 Japon を、音の美しい‘ヤポン’と読み、語尾に、ミクロネシアとかメラネシア、ポリネシア、インドネシアなどのような島嶼部を示す‘ネシア’nesia という用語を付けたものであろう。ヤポネシアという用語の真意を要約すると、日本列島の社会や文化の基層にある、南島的な側面を強調したものだと思う。これは日本民俗学の泰斗である柳田国男先生が日本列島の社会や文化の起源のひとつを“海上の道”に求められたことと、一脈通じている発想であるといえよう。

島尾氏は、このような造語をした背景を、

次のようにも述べている。

「日本という名前がついているのに、どうしてヤポネシアで呼びたいのかと言いますと、わたくしは、『もう一つの日本』というようなことを考えたいからです。』日本についてのイメージはそれぞれにいろいろあると思いますが、わたくしはどうしても『日の本』と言う、どう言ったらいいのか、何か強く意識する対象があつての結果で、もとの言い表わし方ではないような気がするのです。お隣りの大陸も世界の中心の国だという意識があつて、自分の国の名前を『中国』としているようですが、日本という漢字の組み合わせもやはり大陸を意識し太陽の中心だという、非常に緊張した状態があつて、『日の本』だというふうにつけているような気がします。」〔同上書：47-48〕

このように、島尾氏によるヤポネシア論は、文学者特有の鋭い感性にもとづくものが出発点となっているけれども、本稿の筆者の日本社会に関する歴史人類学観察ともかなり重なり合う部分が存在している。

島尾氏が指摘しているように、日本社会の基層には、なにか後世発達した‘サムライ’文化とはきわめて異なるリラックスした文化が横たわっているように思われる。これはまさに、日本列島が大陸部の東アジアに比べると、温暖で、マイルドな海洋性気候のため形成された‘南国的’風土と深い係わり合いがあるのだろう。古くは魏志倭人伝において、中国大陆の人たちからみて、倭人の風俗と海南島あたりの住民の風俗とに‘混同’があったという指摘があるけれども、これには無理からぬ理由があるように思われる。それというのは、日本列島の住民も海南島あたりの住民も、その文化がきわめて海洋的で、大陸の人間の目にはきわめてエキゾチックに映ったからだろう。さらに、同緯度に住んでいた場

合でも、きびしい大陸の風土の中にある者からみれば、海岸地方とか島嶼というものの自然はやさしく、なごやかな‘南国的’なものとして目に映ったに違いない。京浜地方に住む者が伊豆半島や伊豆諸島に行ったり、京阪地方の人間が紀伊半島や四国に行った時のことを想起すれば、その感覚は十分に理解できよう。

ヨーロッパ人は、よく「ブドウのできるころには、悪い所はない……」というけれども、日本列島をめぐる東アジアにおいて、ブドウに相当する植物としては、おそらく柑橘類がそれにあたるのではなかろうか。その意味で、日本列島南部のかなりの部分は、中国南部の温暖な海岸地方と同様に、柑橘類の適作地となるような気候の良い、住み良い場所なのである。この地方は温暖だけでなく、東海岸性の夏雨型の地方であるために、冬季の生活がきわめて困難であった古代においても、日光に恵まれ、比較的生活がしやすかったのではないかと思う。

今日のように、近代産業が発達した日本においてさえ、国土の7割近くが森林もしくは山岳地帯であるところから考えると、古代の日本列島の中心部は、全体として、うっそうたる森林に覆われた山岳丘陵地帯が支配的であったことは、想像に難くない。換言すると、山が海にせまっていたのである。そのため、今日のわれわれが考える以上に、日本列島の原住民たちは、イノシシやシカのような野性動物や、山菜や木の実、草の根などの山の幸に恵まれていたと考えられよう。しかも、豊富な森林資源は、住居やエネルギーを含めて、あらゆる意味で、この島国の人たちに恵みを与えていたに違いない。

一方、目を海の方に転ずると、黒潮と親潮が日本列島の海岸を洗っている。そのため、これらの島々においては、カツオ、イワシ、イサキといったような暖水系の魚類に

も、シャケ、マス、タラといったような冷水系の魚類にも、事欠かない。また、海岸には、アサリ、ハマグリ、サザエ、アワビのような貝類、カニ、エビ、シャコ、ホヤ、ナマコといった小動物、コブ、ワカメ、ヒジキ、モズクといった海藻など、豊かな海産物は枚挙にいとまがないほどである。さらに、日本列島の住民の生活を容易にしたのは、塩がどこでも入手できやすかったことであろう。そのため、日本列島の古代人たちは、山の空間と、海岸の空間の中間に横たわる、芦などが密生している沖積平野や沼沢地を開拓しはじめた弥生時代の農業革命期に入らずと以前の縄文時代より、物質的にはきわめて恵まれた状態にあったと考えられる。それを裏付ける証拠として、多くの考古学者も認めているように、日本列島ほど、遺跡とか古墳の類が多く残されているところは、世界でもあまり例がみられないという。おそらく、古代の日本列島は、当時の技術水準下にあっても、きわめて暮らしやすく、住みやすい地理的空間であったに違いない。しかも、前にも述べたように、日本列島を取りまく大洋は、住民をアジア大陸で飽くことなく繰り返されてきた戦乱から守ってくれたのである。かくして、そうした日本列島のエコロジーは、元来楽天的な住民をますますリラックスさせたことは間違いないであろう。

このような自然的、社会的環境のもとにはぐくまれてきた日本列島の住民たちは、個人や家族の成員たちのくったくのない、自由な行動を束縛しかねない父系親族集団とか、部族組織のような社会的枠組を、みずから求めてつくり出そうとはしなかった。この点は、中国大陆の人たちとは、かなり様相を異にしている。別の言葉でいえば、われわれの祖先たちは、人間関係や社会生活に関して、いろいろとわずらわしい制約をとまなう父系制度のような凝集性の強い社会組織を発達さ

せる必要がなかったのであろう。せいぜい、近親者とか村仲間とのアイデンティティーを固め、社会的に小規模な凝集性を発揮すれば足りる同族結合を少し発達させれば、島における生活が十分にやってゆけたのであろう。

このような自然的ならびに社会的背景のもとに形成された双系社会は、家族や村落、また、同族といったような自律集団 (corporate group) をつくるだけで、それ以上の社会的統合をみることはできない。すなわち、親族集団といえども明確に組織されていない社会である。また、もし、これが仮に若干組織化が進んだ場合でも、水平的には拡がり小さく、また、通時的な厚みも薄い社会なのである。しかも、双系社会においては、男女の性別すら未分化なことが多く、日本列島の住民の場合でも、基本的にはこの範疇に属すると考えられる。そのため、双系社会を非系的 (non-linear) とか、性無差別的 (cognatic) 社会と呼ぶ社会人類学者もいるほどである。

双系社会に属する人々は、自分たちの祖先に対してさえ、あまり具体的な関心を持っていないのも、ひとつの特徴である。われわれ日本人の場合には、よほどの例外的な人を除くと、曾祖父母についての知識を持っていないばかりか、8名はいるはずの曾祖父母についても、たいていの場合は、せいぜい1~2名の人の名前を知っているだけである。とはいっても、この事実は、驚くにあたらないと思う。日本では、明治維新までは、一般庶民の大部分の者が姓を持っていなかったことを想起すればよいであろう。厳密な意味で、自分の氏にあまり関心を払う伝統のなかった者が、直接関係を持つことが希れである3代以前の祖先について、十分な知識を持つはずがないのである。

系譜が浅い、このような日本社会の状況は、かなりタイ社会にも当てはまると思う。

かつて、彼の地で村落調査に従事していたころに、タイ人はしばしば隣人の^{ナムサクン}姓を知らないのみか、極端な例になると、自分の姓さえすぐに思い出せない若者にぶつかり、こちらの方がいささか狼狽することもあったのである。

このような双系社会は、大掴みにいうと、‘その日暮らし’的な背景のもとに成立した社会である場合が多いだけに、これは物質的にも、知的にも、蓄積体系の未発達な社会といえることができよう。いわゆる古典文明がけんらん豪華に開花したのは、日本や東南アジアのような双系色の濃厚な社会ではなく、中国やインドのような父系的単系社会においてであることは、あながち、歴史的な偶然ではないだろう。

V ‘緩く組織された’ 社会における国民形成

これまで述べてきたように、日本列島の基層にある社会は、Embreë をはじめとする数多くの欧米における日本研究者の考えとは異なり、‘緩く組織された’双系社会を基軸としたヤポネシア的な世界なのである。しかしながら、このような社会に、人工的な手が加えられることなく、そのまま放置されると、社会的統合は家族、もしくは、せいぜい村落や同族レベルに留まってしまうことは、すでに指摘した通りである。このような社会が曲がりなりにも社会的に^{タイク・オフ}離陸し、部族や部族連合、あるいはそれ以上の社会的統合を達成し、ついには国家というような超血縁的、超地方的な^{ソリダリティー}団結を追求してゆくためには、これまでの社会構造の‘革命的’な変革が必要とされるであろう。このような日本社会の特徴について、わが国における東洋学の権威であった内藤湖南が、東アジアの歴史を踏まえながら、次のような記述をおこなっていること

に注目する必要がある。

「日本民族の国家成立は、ほとんど高句麗と同時代であると考えられるので、三韓よりも早く開けているが、ともかくその民族が国を形成した経路はほとんど同一である。もちろん日本には高句麗、三韓のごとく一度支那の領土になった後にはじめて民族の自覚をきたしたのではなくして、単に支那人が日本内地に移住し、もしくは海上交通には民族形成以前から、特能をもっていた日本民族が、朝鮮・支那沿岸で、支那民族に接触して、それから民族形成の方法を学び、多少は自発的に国らしきものを創建したのであった。……従来の日本の学者の解釈の方式は、日本文化の由来を、樹木の種子が最初から存在して、それを支那文化の養分によって栽培せられたというように考えるのであるが、余の考えるところでは、たとえば豆腐になる素質をもっていたが、これを凝集さすべき他の力が加わらずにあったので、支那文化はすなわちそれを凝集したニガリのごときものであると考えるのである。また他の一例をあげてみるならば、児童が知識となるべき能力を自然にそなえているけれども、それが真の知識となる方式は、先進の年長者から教えられてはじめてできたと同じである。」〔内藤 1978:120〕

このことを、内藤湖南は別の機会に、次のような表現を用いても述べている。

「……日本には、文化の種ができ上ってあったのではなく、ただ文化になるべき成分があったところへ、他の国の文化の力によって、だんだんとそれが寄せられてきて、ついに日本文化という形をなしたのではないかと思われるのであります。」〔同上論文:116〕

このように、内藤湖南は、当時の学問水準の限界の中でも、日本社会や日本文化の形成

について、きわめて的確な指摘をおこなっている。

内藤湖南がいおうとしているところを、今日の歴史人類学的な用語に置き換えて、別の解釈を加えると、大体次のようにいうことができよう。

日本列島の住民は、すでに述べたように、恵まれた自然環境と平和な社会環境を持つヤポネシアの風土のもとにあった。どちらかという、かれらは禁欲的というより楽天的で、くったくのない人生観や世界観をはぐくんできたように思う。その帰結として形成されたのが、‘緩く組織された’双系社会ではなかろうか。このような社会は、基本的には、タイ社会と平行現象を示しているのであろう。この種の社会においては、人々はきわめて暖かいが、その日暮らしの安易な生活を求めてしまい、村や同族を越えるような社会統合を達成することは困難であろう。自然破壊が進まず天下が泰平である場合には、人間にとって、このような状態はけっして悪くないと思う。しかしながら、いろいろな意味で人人の生存が脅威にさらされた場合には、話は別のことになる。

この社会の指導者たちは、日本列島に外圧が加わったり、社会的危機が到来すると、外部からなんらかの意味での統制原理を導入し、社会にタガをはめることによって、‘緩く組織された’社会を‘金属型’に転化するような努力を重ね、その危機を乗り切ってきたのではなかろうか。

日本列島の指導者によるこのような努力のはしりは、なんといっても大化の改新だったと思われる。中大兄皇子に代表される当時の指導者たちは中国大陸から国家編成の原理という統制原理を導入することによって、この吞気で、くったくのないヤポネシアの風土に国造りをしようとしたのである。この涙ぐましい試みは、全体として、必ずしも成功した

とはいえないものの、この島国で、その後国造りに努力をした人たちの^{あかし}燈となったことであろう。

このような先達たちの努力にもかかわらず、この社会の基層に潜むヤポネシア的なものを、容易に払拭することはできなかったようである。大陸からの統制原理の影響を直接的に受けたはずの、上層の人たちの間においてはさえ、長く自由奔放な考え方が消えることはなかった。これは万葉集はいうに及ばず、王朝文学の中にも、かれらのリラックスした人生観や世界観を十分にうかがい知ることができよう。まして、統制原理のマージナルなところにある庶民においておやである。これらは、後年の島尾敏雄氏による指摘を待つまでもなく、‘頭から押しつけるようなかたい感じのする’サムライ日本の文化とは、かなり異質のものといわなければならないであろう。

その後、時代が下っても、日本列島においては、指導者層による統制原理の導入が何回となくおこなわれた。そのもっとも典型的なものとしては、封建制の成立にともなう儒教的な倫理の導入であろう。幕府の指導者たちは、放置しておく、まま放縱になりがちな双系的な社会に、儒教という父系原理のタテマエを教条主義的に移植し、統制の強化をはかった。これを象徴的に表現すると、町人における人情に対する、武士の義理の対立ということになる。社会秩序の維持を天職とする武士階級は、統制の原理の現実的表現型である義理に固執した。それに対して、これを必ずしも是としない町人たちは、人情を行動の原理とした。

このような統制原理と双系原理の相克は、日本列島の歴史の中に、何回となく垣間みることができる。たとえば、絵画についても、ある程度いうことができよう。江戸初期におこった狩野長信を創始者とする狩野派の絵画

は、格式を尊ぶ武士階級のイデオロギーに適応したタッチで、きわめて整然とした、端正なる画法が創出された。そのため、狩野探幽(1602—1674)の場合には、幕府の御用学者として迎えられ、200石の禄を与えられたほどであった。しかるに、同じ江戸時代でも後期になると、喜多川歌麿の浮世絵や東洲斎写楽の風俗画に代表されるような弛緩した雰囲気天下に満ちあふれ、双系社会の生地が露呈したのであろう。歌麿の場合は、幕府の手によって、ついに投獄され、手鎖の刑に処せられたほどであった。

19世紀に入って、日本列島の人々が、イギリス、フランス、アメリカのような欧米帝国主義の強力な圧力にさらされると、はじめは不承不承に門戸を開放したが、やがて経国の方針に一大転換を画することになる。それが一般にいわれている明治維新なのである。その後は富国強兵の政治的スローガンのもとに、日本国としての国民形成の総仕上げが急速に進行し、‘金属型’の国家になったかにみえた。このような日本社会や日本文化の側面に、外国人の日本研究者は注目しがちであったのではなかろうか。

しかしながら、指導者層による日本社会の‘金属化’の努力は、1945年8月15日の敗戦とともに御破算となり、戦後の混乱期を迎える。かくして、われわれは今日のヤポネシア的双系原理の中で、昭和元禄の余光を見守っているのではなかろうか。

結 語

日本列島の社会の展開を、歴史人類学的に一瞥すると、Embreeをはじめとする欧米の日本研究者のように、サムライ日本のイメージをもととした、わが国を‘強固に組織された’社会とみることが、必ずしも正確でないことが分かるであろう。むしろ、日本列島の

社会の基層には、タイ社会をはじめとする東南アジア社会と平行現象を示す双系的な傾向が横たわっていると考えられる。従って、その意味からいって、Embree が “Thailand : A Loosely Structured Social System” という論文で犯したひとつの誤りは、タイ社会の‘緩く組織された’双系的側面と、わが国のサムライ日本的な‘強固に組織された’側面とをだけ比較したことにあるのではなかろうか。

もっとも、わが国の常民社会にみられるくったくのないヤポネシア的な傾向と、支配層の統制の原理との対立や相克は、なにも日本特有のものではないと思う。たとえば、中国のような社会でも、一見、父系的な‘強固に組織された’儒教的倫理規律と、まったく似ても似つかないような‘緩やかで’大らかな道教的原理が共存していることも忘れてはなるまい。ただ、中国大陸が日本列島と決定的に異なるのは、歴史的にみると、絶えず‘乾燥地帯の暴力’〔梅棹 1967 : 94-96〕の直接的な脅威にさらされてきたために、全体として、ヤポネシア的な社会にならなかったのではなかろうか。

しからば、タイ社会のような東南アジアにおいてはということになるが、この場合は、さらに恵まれたエコロジーと立地のおかげ

で、日本列島の住民のように、外部から統制の原理を導入する必要も少なかったし、その衝動もあまり生まれなかったのではなかろうか。この点については、さらに別の機会に論じようと思う。

参 考 文 献

- Evers, Hans-Dieter, ed. 1969. *Loosely Structured Social Systems : Thailand in Comparative Perspective*. Yale University Southeast Asia Studies Cultural Report Series, No. 17. New Haven. x+148 p.
- 石井米雄 (編). 1975. 『タイ国——ひとつの稲作社会』東京：創文社.
- 岩田慶治. 1964. 「北部タイにおける村落社会の解体と再編成過程——部族から国家への道程」『東南アジア研究』2(2) : 2-29.
- Leach, E. R. 1960. The Frontiers of “Burma.” *Comparative Studies in Society and History* 3 : 49-68.
- 水野浩一. 1970. 「書評 Hans-Dieter Evers (ed.). *Loosely Structured Social Systems*」『東南アジア研究』8(3) : 427-440.
- . 1976. 「家族・親族集団の国際比較——タイ国と日本」『社会学評論』26(3) : 90-109.
- 内藤湖南. 1978. 「日本文化とは何んぞや——その二」『日本民俗文化大系第11巻』東京：講談社.
- 島尾敏雄 (編). 1968. 『ヤポネシア序説』創樹社.
- 梅棹忠夫. 1967. 『文明の生態史観』東京：中央公論社.